

看護未来塾「第一回勉強会に参加して」

テーマ1「地域における新しいケアモデル」

① 講演内容の概略

新潟県長岡市こぶし園 吉井靖子さんから、地域包括ケアの基盤事業となった特養解体から入所者の元居住地に近い地区への移住計画、彼らが居住する小規模施設を中心とした地域づくりの事例について報告があった。近隣住民、子どもらを巻き込みながら、地域包括ケアとしての地ならしを地道にすすめてきた。そして、現在、ICTを活用した情報ネットワークを構築し、在宅、施設の垣根を越えたケアモデルを推し進めていることが報告された。

② ①から学んだこと

根底にある理念は「住み慣れた地域社会で安心して暮らしが続けられる環境づくり」であった。特養での社会生活から隔離された暮らしから、ケアの継続性を担保しつつ地域社会における暮らしの再獲得のために、ダイナミックな発想の転換、将来の顧客となる住民教育をも念頭に置いた活動推進、連携実践を柔軟にすすめていくために欠かせない情報共有のリソースづくりなど、本ケアモデルの構築には様々な知恵が散りばめられていた。最初は素朴な「山の上の箱の中での暮らしが人生の終焉を迎える暮らしでいいのか」という問いからはじまったという。その問いから理想とするケアを実現するための道筋は、施設内の職員をはじめ、行政や住民など多くの人の協力を得たうえで、長年にわたり結実した成果である。当たり前を当たり前にしていくためのそのような素朴な疑問をもち続けられるようありたいと思った。

③ ディスカッションしたこと

18 余名が参加した。このようなケアモデルを構築するに至るノウハウなど、質問が集中した。住民の力、地域の力をどのように集めるか。協力者や賛同者を得ていくとき、へりくだりすぎず、平等な関係性を創っていくことも必要なこと、国や自治体から資金を得ていくためのデザインやプレゼンテーション力も不可欠であることなど意見交換した。また、ICTの活用は単なる業務改善だけでなく、利用者や住民が連携を目の当りにする機会にもなること、地域に特養が下りてきたことで家族や友人の面会がしやすくなるだけでなく、まるで自宅の延長線上にあるような家族がいることなども追加報告があり、改めて本ケアモデルの意義は深いと感じた。

ディスカッションの最後にまとめとしてお二人の先生からのコメントが印象的だった。中島紀恵子先生は、「看護」にこだわらず、「主体となる助けたい人」を思うことから始まるのではないかと言われていた。川島みどり先生は、中島先生の言を受け、それでも「看護にこだわる」必要性がある、近年、医療と介護と言われるように、看護の存在が見えにくくなってはいないか、医療の中に看護がとりこまれてはいないか、という問題提起をされた。「看護」として、素朴な一市民として、双方の視点を忘れずにこれからも考えていきたい。

文責 原 等子